

特36

905

蓬島主人時代記圖彙

下

蓮如上人御一代記圖繪卷下

① 御真影御遷座並三井寺より御真影と遷る事

山科御影堂壯麗に成就

假心厨子に移す

今山科堂より宿願を成す

寺前を往回し

御影堂を遷す

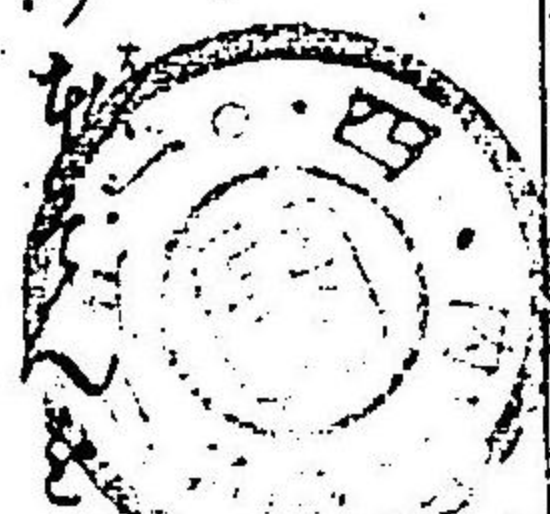
昔合の御影も

結核の御影も

上人の御影も

以境内地の地形も

近松の御影も



はかき今山科の御影の儀式調ひ叔廿八夜に上

西宗寺に安置す

仰ける、叔で年来の本堂に日すて成就しける

寺前を往回し、心の中におぼしめし、存余のうらや

やまを、安き御影の往生を遂げむと念を成し

尊く思ひまゐる、曉方まで、御影も、御影も、御影も

と通夜を、悦び、いと仰せ、きき、叔の在るも、御影も

將軍の御影も、所も、兼、法も、ひ、御影も、御影も、御影も

上人の御影も、尊く、御影も、御影も、御影も、御影も

三井寺へ修葺されたる本寺門の衆徒異議をかけし真影を山科へ移す所とて  
 遷りたる其由を尋るハ文明三年二月より正影像三井寺へ移す所とて今年まで十ヶ  
 年の間ハ諸國より宗法日々に夥多して寺門の境内狭くして弥勒の出せし  
 事と懐ひらるる事今山科へ遷るハ三井寺の衰微あるべしと一山會令て渡す  
 所とぞ拒ける其時上人法せざるハ然るハ等身の形像をつくり而替へし  
 元元の如く蓮淨法師を置るべしと色々に御信言すして遂は正影像を志  
 かく山科へ遷るべしと云々

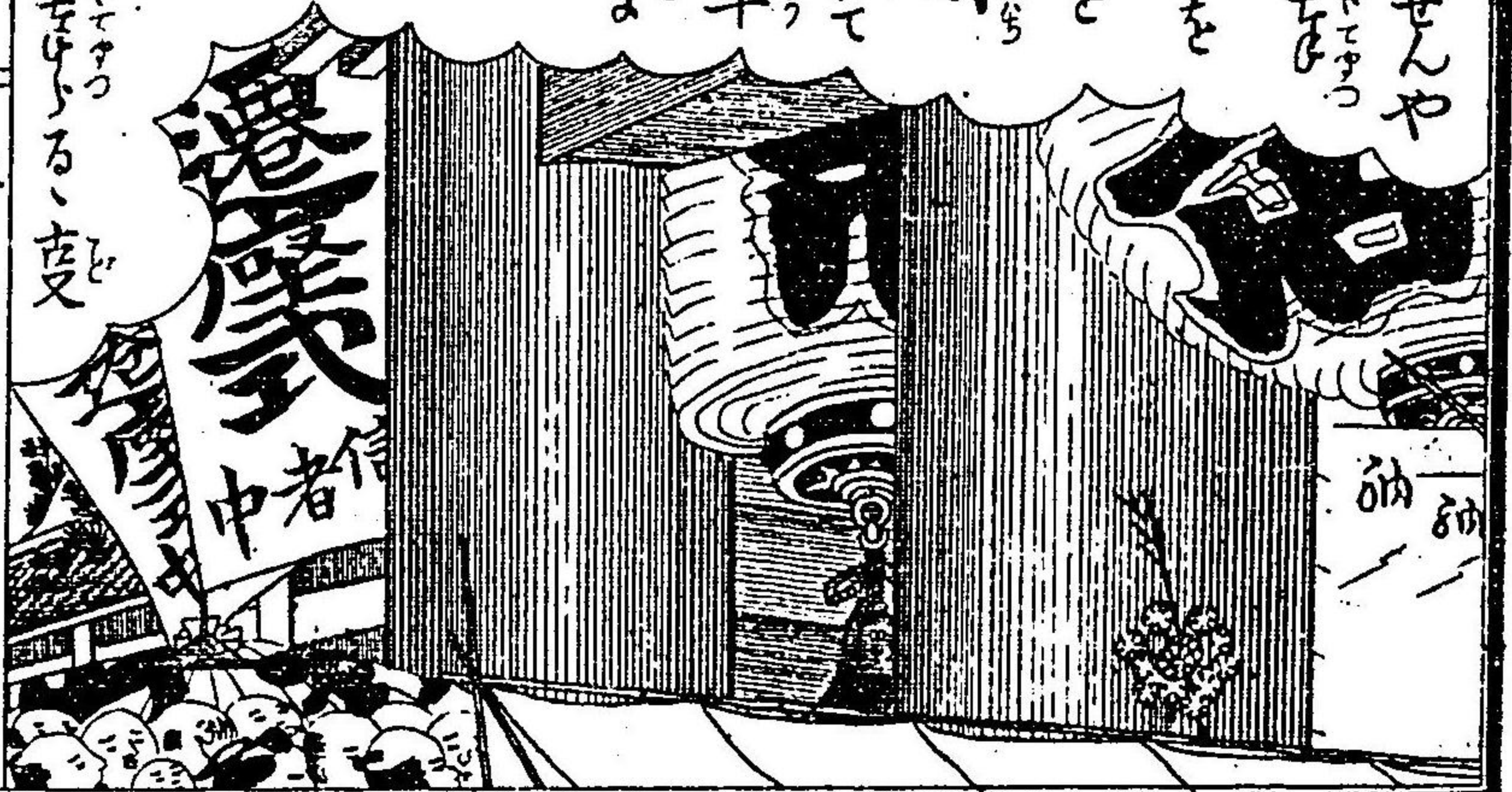
○山科にて七晝夜の法會初て行る並三種の神器の御啓言の事

蓮如上人曰今こそ本願寺浄土真宗の本寺と申は山科の惣として日本に於て親  
 鸞聖人の流義すしとて別をとりとて御真影のありはす  
 本寺と申すは其故に覚如上人衆專房に於ては政邪抄の  
 中に祖師の御本所を茂如く及びつる建立の私の在所を  
 本所と自称するも冥加を存せし利益を思はざる族大



傲慢の妄情をりつていさむる仏智无上の他方を受持せんや  
 やと官にたまはる方にはすとも此形像を安置し  
 る所こそ本寺とまきび忍びなき事ども三種の神志を  
 帯しむべきまじし王といやさざる如く然きハ今は正影像を  
 三井寺より山科へ移したる所の儀一さすとのもひて別  
 今年十月廿一日の迄夜より七晝夜の法會山科に於て  
 始て修りなされは満位之趣を山科に建立の文章  
 正影像も其正影像ハ今西宗寺什家の隨一あり良  
 文明三年四月上旬より正影像ハ天津より移して  
 務に於て一經回しむるは本地に於てりつる本  
 寺にまじりて人々覺來あく思ふ所は今年今月一は  
 居住しむるの有難やと皆人々の涙もむせびたり

山科阿弥陀堂御建立並寶祈延長を祈りまはしむる、変



同年十二月中旬の比より上人思召立あるは是れ既成龍一也然其本願寺元  
 車勅願所にて他異ある寺ふまき此上ハ阿弥陀を造立して先帝の御菩提  
 當今の寶祈を祈りまんと思召き又吉野山へ此首修せさせ阿弥の柱二十餘  
 本立ちしは既に文正十三年もあつたまき正月十日は  
 吉野の禁山科へ到来し因茲二月四日手斧始りて同年  
 四月廿八日棟上の程候りて六月八日假仏殿をまつり御  
 移後の規式執りせむ幸あう今年六月十八日前住  
 存如上人の二十五回忌まつりせむは是れ十一日の迄夜  
 より七昼夜の正執行法事なるより遠近の門徒  
 わきもくと群集しては壇多目的の俵のまへは百倍せり  
 又其翌年文明十四年正月十七日より大門を再建立  
 あさき四方の並樹塔海築地鼓枹滝樓茶所轉  
 轉橋橋の等まで今年とくく成龍せり又その時



と一文明十五年五月中旬又河内國古市郡譽田の  
 野中の馬とつ瓦沙をばて瓦を焼てこもぐ瓦普不ぞ  
 あされりて文明十年より今年八月まで六年のる  
 兩御堂書院等所集會所外部屋々まで残るは  
 成龍せり誠な莊嚴いと美藤あもとて華を尽し  
 がぐ今世は異國へ知れ日本國ははぐひあき大伽藍  
 こと貴賤賞せぬそのいありなり

廿一にて美を以て易修道を教ふ並選子内親王和歌の古文



蓮如上人諸堂成就の後返教びの考時つ徒を集めて修せしむるはを仏を懈怠す  
 ることありとも往生すまじきを疑ひ致くはば修陀如来を一度修こまひせり  
 往生決定の後あまは懈怠ありとも浅きやかる懈怠ありのふまきもはたすけハ  
 治定こつちがやくと疑ひを仏を中ころを他力大行の正信優ありとるを念仏やま  
 こと修せまじき時つ徒の中の内一人は修せしむるははたすけありなるのありごとと念

仏中へ又はたすけりしむる変のちがひさよと念仏中へくたやとけきまづも  
 より但心定聚の方にはたすけりしむる懐くもる滅度の悟りの方にはたすけりしむる  
 の有難さうとす心は佛も仏もあるをまぶこるよりと修せぬひき又り時山科  
 の郷中は一農夫たりて兄弟の女を捨りて家空朽て貧しさきども孫陀の本初は飯入  
 時と上人の正教化を聽きてして仏恩報謝の称名を憶ひける形て孝弟の風趣まがじ  
 て二人の親もあく夕の暮れと消ゆる兄弟のむすめ詮方あく同居ある

里長日蓮宗の家はまは公一侍も日以親この教にて称名を  
 憶ひける此家の主人がさき法華宗あまは決して念仏をば  
 林下ける兄弟のりの仏思ひすまがさくやたりん田極方  
 臼挽粉挽の時も称名の代は日すまはまづぞやかのすをと  
 誓ひしつめて念仏をわける其ともくきて梅白一春  
 ともあまは教入して一日ふ一日の晩をもり山科の山堂  
 こそ来り上人の御勸化を聽きて涙の海とあるまで稱



名を憶ひける清法を終りけき諸人皆退出し  
 けるまは兄弟のりのは世にひきまはし孝をよみて泣居  
 とも上人怪しとみ二人の女子は何ゆへか洋哭を  
 るぞと尋ねるかの者もやう雨親の姿も但せ称名  
 を念中けるが親も身はうりて後日蓮宗の家はま公  
 一侍もかさく念仏を林下やさきなるも一信方あく忘まさい  
 ぞやかのすをと称名の代りまつわし唱へける今日には法慈は諸  
 思ひのまに念仏を憶ひしが哀れな日よりい又すこの如く空まを  
 唱ふる悲しさもしてかく慈傷も及ぶありと上人是を聞ゆし



清法をすらく流るるの善哉く称名の代は忘まさいぞやかのすを唱ふる  
 る佛も知見もつてよろろいけるあまは慈ひあく極末往生も一信心堅固の正  
 同行こと賞嘆すまはする限ありあうりあまは連もあまは忘まされぬぞかのす  
 とも唱ふるさきにて易りの道木かあまはありまは信心お續多るるあま

きと教ひよき終のては於美余有他のたを極てりへふ九歳の及ぶ所なり  
 此とせし世は美嘆せられたるはしむるも此例ありて内親王伊勢賀茂の存  
 宮齊院は立せるも景り天皇より下りたり其の時忘言あり佛を中子といひ  
 髪を深紙といひ髪を良とはといひ寺を瓦普といひ僧を髪長といひ尼を女髪長と  
 して是延式出より詞花集報の終は選子内親王賀茂の御宮ふときこへり時称  
 名の代り西はむらひてより又

之へともいむとていすねとあればを極とそむきて極をのこぞあく  
 選子内親王

世 大段御堂市草創 並 聖徳太子示現の事

櫻於東成郡生玉の庄内大段の庄坊に蓮如上人八十二歳明應  
 五年の以草創あり一靈場あり第八男實如上入は寺  
 務を極懐ふされ山科南殿に隱居すく工信證院とぞ  
 申せる上人の時河忍出口に渡駕あさまきそれより富田  
 溝花出野宮あどの辺に止出あたるひ泉に埒平砂又



佐野嘉祥寺貝塚に徑回ありて人民を化益するに上  
 洛あり二月廿二日ありなせば天王寺に詣りむひ作  
 れたるやうに神は四天王寺と申へ聖徳太子廿二歳の御時守屋  
 の逆馬を誅戮の王頼成就の後建立するより王造に始り構の岩ま  
 たりたるを此地に移されたる悉も聖徳王の救世観音の垂迹あま  
 此土に示現すくして仏法を弘通する観音の西方浄土の願士の菩薩  
 として弥陀の果上観音八因位あまは因として果を尊みたる故に空冠を彌陀をい  
 たるきむ其う(此地にむら)親尊轉法輪の勝如ありて時太子の長者の身と成て  
 如来を供養するより刻も今此宝塔金堂の極樂浄土の東門中心にありて一り然る  
 天王も(兼詣)の人々本地といひ垂迹といひ太子の御本意あまは彌陀を信じる人へ太  
 子のほころにもかまふべきことひ百廢千度悉るといふも太子の本意は遠  
 せすは後するあるべし然るに當流の行者は彌陀如来をたのみ信心決定して往生極  
 樂の覺悟を究めるともへ太子の信心をかまふべし信心お續怠りあくと示るる



人々感涙にむせびくる上人天王寺より玉造のからへは越えされ一何事ともあり十四五  
 歳むろ思き人ありて上人申くるは爰より寺地なり一覽あきれて一寺をば建た  
 るべし此方へと留ひきる上人此見と伴ひむひて山上に居り遠見あまは淀川漫々と  
 て八功德地を表し西海の潮の雲つ下ありて日想觀をあらはし千船の往來も自在  
 ありて陸に金剛山にのびきて法喜井の淨利と憐り葛城高向の山聳へ西に八磨耶の言  
 根兜山六甲山あり海濱に三天女の浦須廣明石の浦月落かる淡路も山まで手に執  
 る此地を觀應の風景され誠工園壯觀の地ともつひつげ身は天晴此地に御堂を建  
 立せむやとほころを究めんと勿心ちかの見えへきなる未だ此地に御堂建たざる  
 時さるべき奇瑞多しなり今の見へは聖徳王の化現あるべしと皆令申すべし上  
 人は隱居の後只假初の事と付ても自心教人信の思召の外他更あうき勅て明應  
 五年の秋九月より彼山をひきき地獄とせしる時法安寺の兩僧難して明日ハ太愚日ふ  
 きハ初て伽藍真行の日ハ然るべしと申けきハ上人答て如來法中無有選擇吉  
 日良辰の仏説を疑ふべし明日早々創むべしとて土石を掘地面を捌ちるべし不



子の後身にて渡りせむる顯然と本願縁起に曰吾入滅之後生此比丘左長者非

世音にてれ

思議あり外俄に泉涌出又破石瓦子すて土中よりと出現  
 す兼て埋蔵直けるが如きあり木材ハ吉野山より運送  
 石ハ御影里より船路にてまくり工匠ハ都鄙より  
 聚り來りて不日ハ御堂書院門々臺所等迄  
 成就しむひたり

⑩ 聖徳太子未來記 並 本願縁起  
 の文の事

天王寺に於て聖徳王の未來記を見む  
 未來世に到て此寺の東に當て仏閣建たり  
 即ち後身こと記し置せる然る太子ハ  
 本來觀世音の每跡上人の御母公ハ石山寺の觀

賤身弘真教法救濟有情是非他身吾身耳矣又至造岸西方瓦燒置二万枚埋藏密  
 元王修造時鑿取用而已云々思ふに礎瓦の市中に在るるこれ太子の埋置もよハ  
 明るにまゝきてこそ其の文は往昔の宿縁浅うけ因縁を書せまゝ又如行る約束  
 のちりけるふやと宣ひたるも真に所由なりと思ひ合されたり

④蓮如上人御不例並下間法眼安藝勸氣御免の事

化野の落鳥辺野のけづり落き風責賤を扱はば生死必然の道理あるがふへ大聖世尊  
 稱檀の烟をまみりむむハ十惡の授渡も無常の風道るるあり四大所成の形五蓋併和  
 合の質みまことぐ磨滅の期もまば上言より下万民もするまで  
 適まぬハ只この一ツあり然るに信證院法印權大僧都兼壽蓮如  
 上人八皇百二代統光院御宇應永二年乙未大谷にて御誕生  
 まり百四代後土御門院御宇明應七年戊午上人八十四歳の  
 四月上旬より御違例まりりり上人宮子六春なき秋去  
 て當年八明應七年壬申夏中旬にもありぬむば予が年齢積



りて既今半四歳ぞか一然るに當年に限りて難の外病悩  
 一からさるる右眼耳手足とろ安らげてまゝあうあざり  
 定命の至りあり又ハ往生極楽の先祖こと疾く覚悟せしむる  
 處之諸存生の中尋ねやべと宣ひたる四月十九日校坂  
 左近將監をつらぬる師参りては脈をうかひは薬をまきり子  
 御食するハた瀉湯をうりり召れり不問五月廿日ハ系詣  
 此され已後ハ出仕もも留りり六月六日に姉小政黃門基親郷光臨



りて上池院を召具りてて敷刻の物語りり醫治は薬を調進しませども更其  
 驗あらず上人度と作らざるハ賊縛比丘脱却於醫王遊乞食沙門彰攝珠於死後と云  
 戒文を後しきるも是滅後ハ不思議をあらはるべきはること後まで思ひ知しませ  
 同月八月下旬下間安藝法眼北國より上洛して上人の切氣を伺ひませり衣を御存生の内  
 には切氣は免なば未來までの面目とまきりませり漸く久しく落涙し御近習衆をれ  
 ころりと信言や上りかば上人宮子ハ汝ハ未來永劫まで劫尚今度北國に於て合戦の



義言語日断の乃才之去あざり言ねて北園に下る事ト程ぞあり不便のる之謗法園授思  
 比皆往の弥陀如来の本願あまき何程の密逆ありとも回心の上ハ子細あるべしとては赦免提  
 まり法眼は前へ召出され尊顔不揚しきり感涙を流し御病体とうかひきり退出し  
 上人の透化の後中陰の内法眼も上人當年の冬の頃より官六明年三月ハ必ず往生すべし又ありその心  
 得て信心相續怠るるあうれとか(ま)も御教訓せられり

⑤上人御病中あざり山科へ移りもさす並吉野の桜を献けまは和号のす

明きハ明應八年二月十五日工室ハわき大段に控て往生せと思へども思ふ旨は上洛して  
 山科に控て往生すべし空善急ぎて山科へ参るべしと傳せけは空善かしてまじり  
 以意を承り即十六日又上洛ありて其用意をせしむける上人ハ十分ハ大段を御立あされ道  
 中静まはせりつて廿日山科へ入御しりける明る廿日は影前へ召あ  
 りつて仰せらるはハ今度ハ不思議に命存へ候ハ大段まで往生被すべき  
 変工及(せ)今一度聖人の御恩顔と拜り奉り度及ひて大坂より  
 三日着上洛申及至高野工室ひて感涙を噴びるハ座中の



人々各と袖をぞ濡しける月廿二日より御往生所を新し  
 造建しむ廿五日ハ四方の土居を手薬しめて御めぐり  
 伊勢土居にて御湯を召されてつる潔りと御教の気色ま  
 たり御門後の面々御余波を引みり月廿七日ハ御堂へ  
 御出座しりては飯堂ハ手薬を後さるし昇せて入せる  
 三月朔日に北殿へ出出りまされ実如上人並御連枝方日席  
 まり数刻は物語まされ我今汝等への遺言ハ更ハ録するは  
 唯信心を決定すべしと仰せしむる月二日は下間五郎元基つし仰付  
 トきて櫻の花を御覽ありたまとのたまその翌日吉野より極を奉りたまは



上人曰御堂の四壁にも若木の桜ありとも今此吉野の花ハ名所の桜ありとつり御覽  
 咲つては花アなとびふる候も又つと依りきぬの彼きり  
 蓮如上人  
 老いへの何やでかや病あやと遠へもや弥陀の浄土へ  
 今日までハ八十五にあまる方の久しと知まや及まらん



御病床の衣服を脱せむの約しき衣裳を以着用され腰輿より先本堂へ入らせらまきまはりく御を珠ちりてそまより東の椽側へ昇出にべしと仰られ庭より御影前へ参りちりて聖人の御尊像に向ひ今生までの拜顔なれまであり必かの圓まで真身は御しをるべしと慈恩のよるひ々まはり人々をぞ絞らぬいふらうせり

共御辞世御詠歌の夏並病床にて御物語の夏

上人御飯堂あさまるとして堂前の花を見あは色ふろく匂芳き粧ひ朝のあおぬきて懸しきまはり見まじりてありしらの風流竹と作せまはり花の心面より丹後の法眼舎弟上野助その外御連枝中薬を昇まじり還御あまはりせしまはり今ハ本懐満足こと御喜あさまき御病床は臥もひて互辞世のほ和音

わまはりあはりなる人もあまのりに難ひまはり、孫院をたのりよ 蓮如上人 八十五 定業きりする 我身は明の年 徒生をぞまじりて 全 同九日 法教房空善房加忍小松の了弥考を召て教討法義の御物語りて上

人々の空善との此参らせたる 鶯の啼きをすば法まけと啼鳥歌(一) 法まけと鳴り人間とて上人の御門徒までありあはり法まけと啼鳥歌(二) 鳥は方きり此鳥の法まけと啼るまはりて頃日ハ心を慰まける 然まども籠不入まはるるに不便之竹井へ落ちてやれとのるひ けまは空善取て教へ放ちける上人曰く此頃ハ鶯籠の内で さぞ迷惑と思ふをけまはりまはり法まけと啼りまはり さまらあやでいふつるぞや今教の中へ放ちけまはり啼ひ 申まはべし是つけても人間の六道四生の籠の内に 出て西方浄土の廣き竹林へ放されまはり如何むらり候はり かるくと空の空善申けるよき鶯をまはりて有かまき 御教化不びと候び申まはり中の人と感涙をぞ得まはり

廿御文帝聽聞並御秘藏の馬とは覧せしは夏

上人又慶聞房を近くめされ何ぞ誦て聞せよと仰まはりまはり御文を



よみまんと申上りかば上人然るべしと云ふ因是大阪府建立の御文を相讀  
 一なり二三返よみけまば龍玄房代りて取上人一讀の御文二三返讀まじりかば  
 上人の御文やうに思議や我作りし物あまども殊勝不覺やぞとて法座を落  
 しまじりたる道理あるが教行信證を六返六要抄を五返安心決定抄を三返表紙  
 の破る祓はらんあされ千の中より百を撰百の中より十を撰十の中  
 より一を撰り凡夫往生の肝文を多しみたり耳ちふむ心けり易き  
 カラ書記しむに要が中の要文あり自ら殊勝こと候し  
 まじりも押りとぞ志す事なる真は聖とつふべきま猶  
 異議しむて文と申すべきこと宣り又一日御秘を  
 ありし粟毛の馬を以て見あされしきより候しまじり  
 四石の内より二疊を上げて侍寢殿の際まで引させられ  
 て侍覽ありし此馬前足を延て涙を流し頭を垂て  
 尾をも振ず躊躇る上人ハ漸少時以て見あるに空善や上



けるハ誠不畜れあまども上人を見奉りて涙を  
 流しけるこそ不思議ありとぞ中なる月十日そろりと  
 起上らせむ御病中の御容貌を圖画に書せられ其  
 御影像不書附させしと銘文云曰



獲一念信 今諸安養 穢身永絶 法性速證

と擡されそれより弟に病氣重うせむ月月中旬の頃ハは容祥  
 つら申りあふ上人を以て我死せハ大阪より持來せる曲取に兼せ正信偈念仏を  
 御影前へ移し申べ一年未同様の又ハ佛法のよりみまあま見しきとく思ひ  
 名聞ハハ何れ我遺骸を見る人々法義も入りやせんと候る同十八日の後ハ  
 我あまあまで兄弟和睦せよ信心と申す中の中の時きとハあまのぞ然ハ法流  
 もまじり叙未昌まべいと候れたる十九日より御食る御服も止させむい念仏を  
 うを唱(ま)せせもあまの廿二日より御相好少しつかにせむ採小忍(ま)せせむ廿三  
 日よりハ脈も何れせむ廿四日に候て御往生とて法教房空善房に傍近く

まづて御足をかへりか上人曰頓て極樂にて對面申はべし繪像の本を想をせ  
 と宮ふとれふよつて屏風に切けりか今生の御願をありやがて淨土に於て真身を相し  
 まふんと宮へは法敬房も空善房も目もくれ心も消入をりあり

廿六 蓮如上人御遷化並ニ御臨終に遇する人々の事

三月廿五日の曉に大地震鳴動し朝日の出る支類にあり見聞の諸人不思議の思  
 ひをさせり是則權化入滅の瑞相あり時つり夜も明をあせぬまは上人修せしむらひ  
 師と成り弟子とある夏は多少の契思を生る内の對面は今にかきけり頓て報土无生の再  
 會を期すべしと宮ふ絶ふ日光東嶺に昇り清虚を晴て音楽空ふま由金色の光ふ  
 宴す前後ふ聚る一族親厚の人々五體を地お投て涕泣咽涙せむるも降あり然  
 る中ふ山科郷の内別々野村の御堂の前後左右の草木の若葉までも悉く枯く花  
 も凋をそ地別を悲み山野花の禽獸も足をとり翼を垂て  
 俗の大聖世尊の御入滅の時ふ異あはれ終ふ明應八年己未三月廿  
 五日午刻正中に頭北面西右股ふけのひ懸るが如くありて念仏

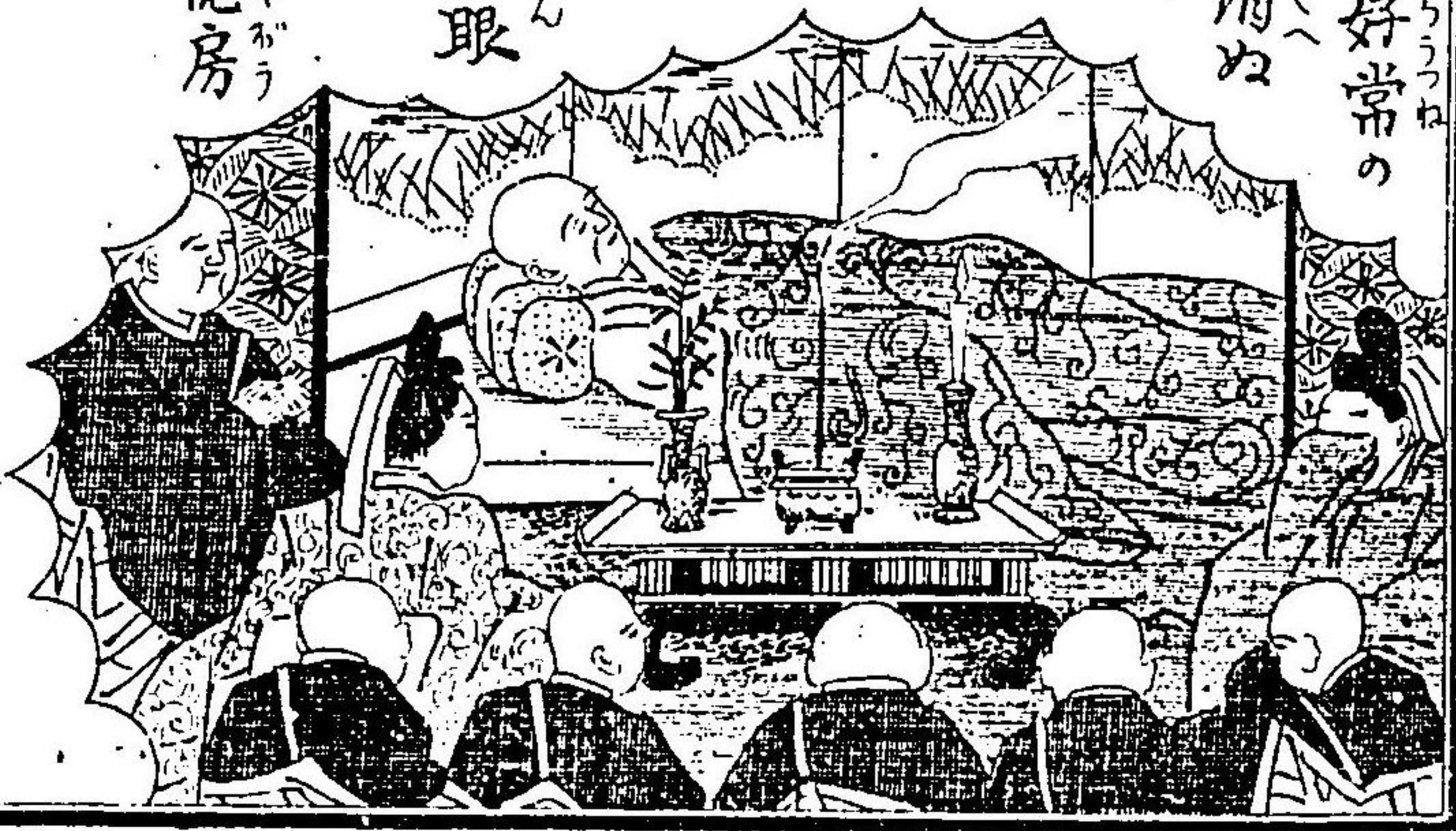


の息をすましくぬ千時春秋八十五歳御身林柔軟りて御相好常の  
 如くは初まれり小誠は日月西の雲ふ隠さむひ法灯忽ち消ぬ  
 圓那の道俗悲傷し遠近の門徒號泣するを宛も抱  
 育の考妣を喪ふに過さず御終焉に遇する人々ふハ

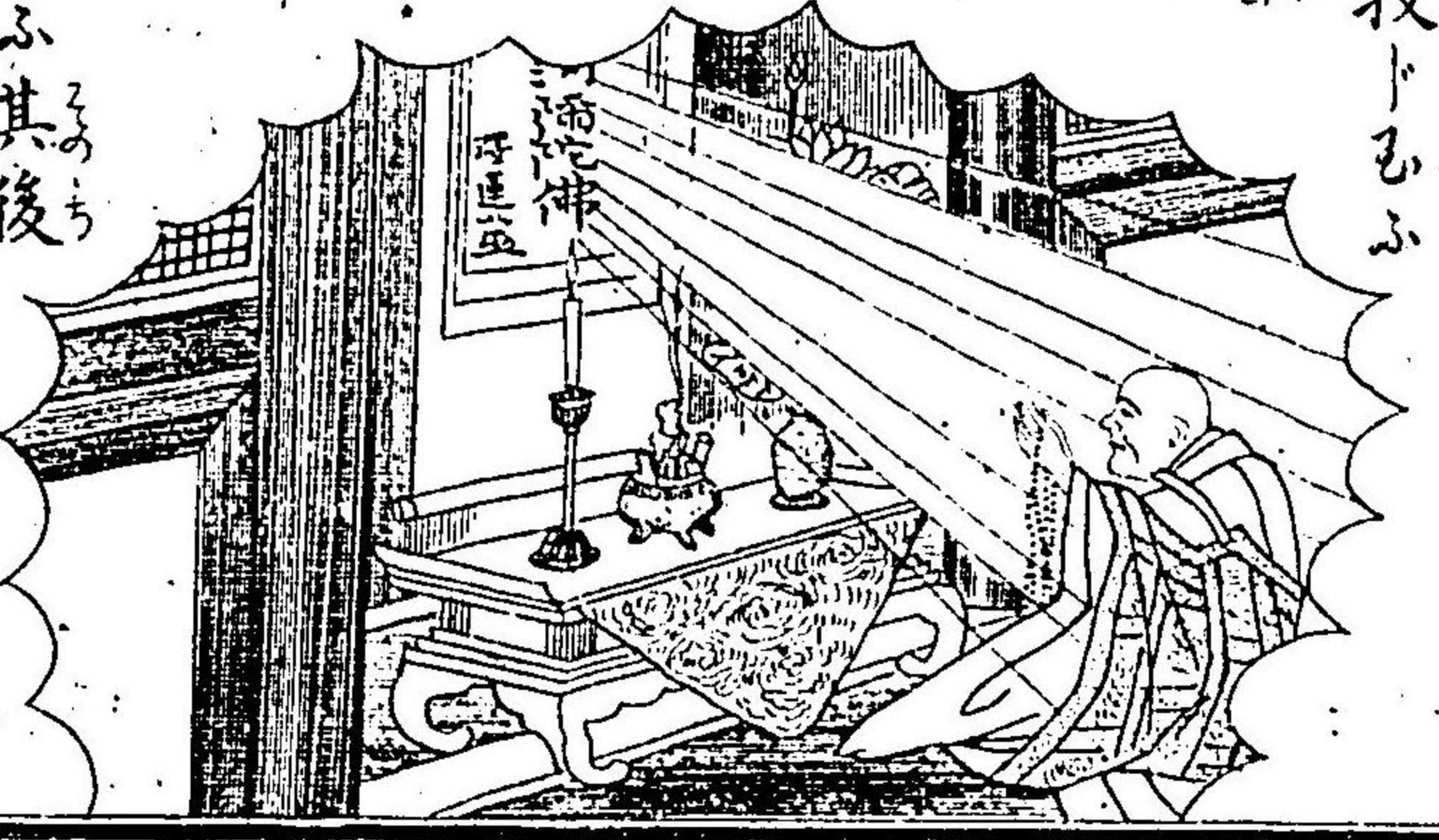
- 大納言法下實如上人 権大僧都北林房 同蓮誓言
- 三位法印蓮淳 権大僧都兼縁 権律師實賢
- 法印実悟 兼往 法印實考 同實從
- 中山中納言宣親卿 姉小路實門基綱卿 下向安藝法眼
- 日五郎左五門 慶聞房 龍玄房 小松了珍
- 順誓言房 法敬房 丹後法眼 同上野助 道德房
- 越前慶祐房 河内淨光房 淨賢房 等々あり

廿六 六字名號奇瑞並祖師の尊像現るる事

伏以蓮如上人我朝不出世しるもて一流の法水を再興し遠土遠境の群類を化益



滅後ふ於て利益を假代ふ者さんとて明應第八弥生の空に弊れむひ眼下靈異を  
 見せむひかり滅後ふ至て其遺徳多き中に上人翰墨を投トモふ  
 六字の尊號の中み字特不思議あり今畧しくこそ書  
 するふ或は御門葉の中に道場を焼失しける時名号續集  
 して多く仏像と成むる有り或は名号焼燬せしが其字形  
 むより明に残り或は名号破燃せしが潮に愈返るも  
 有り御入滅已後十箇年過て門葉の中かの尊輪と  
 安置しききに常に燈明をもちけざるふ名号の  
 あり輝きむる有りおとろひてこそを相する有り  
 光明有り各々にして阿弥陀仏の四字のうへに忽ち  
 方便法身の尊形出来む有り如是拜す間み南无の二字  
 の通りに本師親鸞聖人の尊形鮮敷とて現トむふ其後  
 又蓮如上人の容貌出来しむる居緒を經星霜を重ねていよ其形彰みし



佛像ありて出来む有り上古にも季の世にも如是の奇瑞ありては實に是滅後の  
 利益を末代に知りめんとの法方便あり凡上人在滅の妙事これ多しといへども業  
 するに違はれ畧して僅をこそ著し畢ぬ  
 蓮如上人御一代記圖繪卷下

蓮如上人  
 位をまた一をちみまらなむ  
 よの世をすまむバ名ありたり  
 飛ありあよふいをねむ身あなむ  
 法のまむりよふこそゆけ  
 極楽をんのおくよるぬまきけり  
 ちむむるむのぼりこそあき

明治二十五年九月十日印刷  
全年 九月十五日出版

定價金五十錢

京都市上京區室町新町一間  
寺内上七下木下町卅一番戶寄苗

著作兼  
發行所

清水常太郎

全市區楚屋町御池上七  
上白山町二十三番戶

印刷者

角川清太郎

全區寺町三條上七

發賣所

細川清助

江州大津	小川儀平	全	增村庄三郎
全長濱	吉田作平	全	岡寄左喜助
全彦根	中村藤平	全	品川太右衛門
尾州名古屋	廣田七次郎	全	酒井安兵衛
全	片野東四郎	全	中村六三郎
全	梶田勘助	全	平澤潤助
全	小澤吉三郎	全	武内市藏
越前武生	安立莊三郎	全	萬司曾平
全	西村伊八	全	本川留吉
全	松井助十郎	全	渡邊他之助

加州大聖寺

深城伊三郎

越中高岡

水野義三郎

全

能登安平

全

車文港堂

全 小松

宇津宮源平

全

學海堂小平

全

粽藤平

全 富山

中田清兵衛

全 金澤

近田太三郎

全

大橋甚吾

全

雲根堂一平

全

守川吉兵衛

全

池善平

全

小林恒三郎

全

岡寄與平

全

福田清明堂

全

供田太七

全

真田善次郎

全

北村嘉平治

全

山本吉三郎



